

北海道オホーツク海沿岸における 2013 年の海鳥営巣数と 2014 年から 2019 年までのオオセグロカモメの営巣数増加

渡辺義昭

〒 093-0033 北海道網走市駒場北 4 丁目 5 番 5 号 北海道カワウ研究会

Breeding Numbers of Seabirds on the Coast of the Sea of Okhotsk in 2013 and Increasing in Numbers of Slaty-Backed Gulls between 2014 and 2019

Yoshiaki WATANABE

Hokkaido Great Cormorant Research, 4-5-5 Komaba Kita, Abashiri, Hokkaido, 093-0033 Japan

Abstract. The breeding numbers of seabirds, including Great Cormorant, *Phalacrocorax carbo*, Japanese Cormorant, *Phalacrocorax capillatus*, Black-tailed gull, *Larus crassirostris*, and Slaty-backed gull, *Larus schistisagus* along the coastline from Cape Soya to Shari Town was censused. Confirmed were 462 nests of Great Cormorant on the nearshore bank at 4 sites, 312 nests of Japanese Cormorant at 7 sites, only one nest of Black-tailed Gull, except for the Menashidomari colony, and 1,523 nests of Slaty-backed Gull at 19 sites of which 84.5% were found on the nearshore bank. Breeding number of Slaty-backed Gulls increased between 2014 and 2019 at 4 sites.

Key words: *Phalacrocorax*, *Larus*, Okhotsk coast, Seabird, Breeding colony

北海道海鳥保全研究会によると、北海道には現在 14 種の海鳥が繁殖している（北海道海鳥保全研究会、オンライン）。それら 14 種の多くが天売島、根室地方の離島、知床半島で繁殖し、これら重要な繁殖地では継続調査が行われている（環境省自然環境局生物多様性センター、2015）。しかしながら、普通種や小規模な繁殖地の把握は十分に行われているとはいえず、近年は繁殖地として認識されていなかった人工物の利用も増加している（長谷部、2015）。この数十年のうちに普通種と考えられていた海鳥の数種が大きく減少していることが確認され（Senzaki *et al.*, 2019）、海鳥の保全を考えるうえで小規模や新規営巣地の現状把握についての重要性が増している。北海道北部から東部沿岸では、利尻島（風間ら、2014）、礼文島（長谷部・先

崎、2016；今野・千嶋、2019）、知床半島（福田、2005）、大黒島・ユルリ・モユルリ島（環境省自然環境局生物多様性センター、2015）、浜中町（エトピリカ基金、2017）で海鳥の繁殖状況が報告されている。稚内市から斜里町にかけてのオホーツク海沿岸では、枝幸町目梨泊（村山、2015）とゴメ島（村山、2016）および網走港（渡辺、2016）の報告はあるが、広い範囲に渡って調査は行われておらず海鳥類の繁殖情報の空白地帯といえる。このため、海鳥繁殖状況の基礎的情報を収集するため、宗谷岬から斜里町までの沿岸で調査を行った。合わせて 2019 年までオオセグロカモメの営巣数についての継続調査を行った。

調査地および調査方法

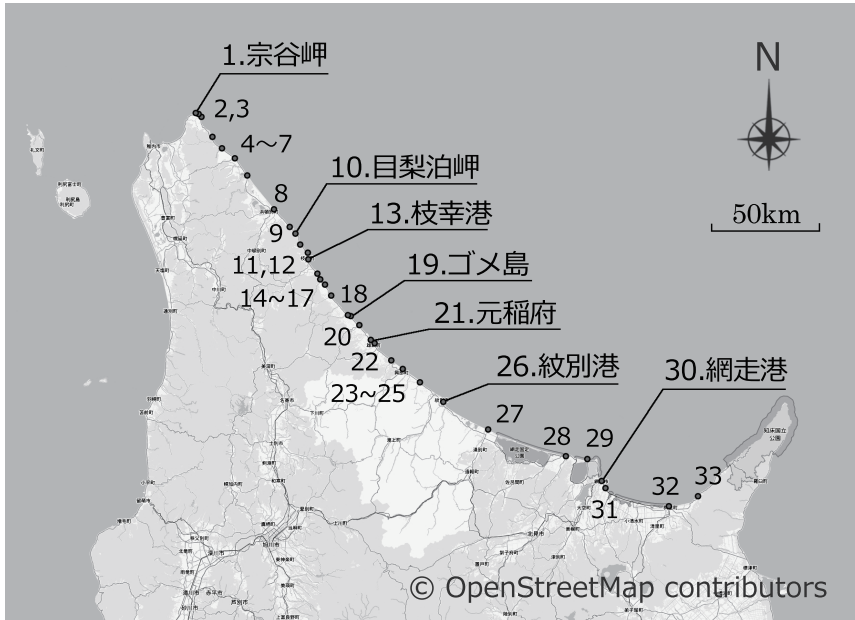


図1. 宗谷岬から知布泊間の調査地点の位置。ベースマップはOpen Street Map (<http://openstreetmap.jp>; 2019年10月10日確認)を使用している。地点番号は表1の地点No.と一致している。

調査は稚内市宗谷岬(45° 31' 33" N 141° 55' 09" E)から斜里町知布泊(43° 57' 34" N 144° 50' 05" E)間のおよそ310kmの沿岸で行った(図1)。調査対象種は陸上から繁殖状況の確認が可能であるウ属とカモメ属に限定した。網走港ではウ属とカモメ属の営巣数が最も多い時期が5～6月(渡辺, 2016)であることが確認されているため、調査は宗谷岬から沙留間は2013年6月5日、紋別港は6月1日、網走港は6月18日、鱒浦から知布泊間は6月4日に行った。能取湖(湖口)については6月調査時に視界不良だったため7月4日に行った。調査は双眼鏡(10倍・口径50mm)と望遠鏡(30～70倍・口径90mm)を用いた。調査は自動車ですべて国道238号線、244号線、334号線を走行し、調査対象種が繁殖する可能性がある港や漁港の堤防・消波ブロックや小島や岩礁などを確認して行った。巣の上に座っている個体を確認した場合には繁殖中と判断し、陸上から見える巣数(最低営巣数)を種別と営巣環境別に数えた。営巣環境は人工物堤防と消波ブロックの離岸の有無別と自然物の3つに分類した。本研究では建物(主として屋根上の利用)についての繁殖状

況は調査しなかった。2014～2019年のオオセグロカモメの営巣数の継続調査は枝幸港、元稲府、紋別港、網走港の4地点で実施した。枝幸港から紋別港は2014年6月8日、2015年6月12日、2016年6月8日、2017年6月10日、2018年6月15日、2019年6月7日に行ったが、2016年の元稲府と紋別港においては悪天候のため調査を中止した。網走港については2014年6月22日、2015年6月21日、2016年6月19日、2017年6月4日、2018年6月10日、2019年6月23日に行った。

結果と考察

繁殖を確認したカワウ *Phalacrocorax carbo*、ウミウ *P. capillatus*、ウミネコ *Larus crassirostris*、オオセグロカモメ *L. schistisagus* の最低営巣数を営巣環境別に表1に示す。

カワウは枝幸港、元稲府、紋別港、網走港の4地点で繁殖を確認し462巣を記録した。全ての地点で離岸した人工物が利用されていた。巣の多くが消波ブロック上にあり、堤防上は消波ブロックと隣接した部分以外はほとんど利用されていなかった。

表2. 枝幸港・元稲府・紋別港・網走港のオオセグロカモメの最低営巣数 (2013年～2019年)

地点 No.	調査地点	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
13	枝幸港	51	35	79	79	104	115	112
21	元稲府	99	106	138	-	127	113	124
26	紋別港	336	495	677	-	581	674	745
30	網走港	493	543	623	686	658	695	689

-: 悪天候により調査中止

ウミウは7地点で繁殖を確認し312巣を記録した。ゴメ島の8巣を除いた全ての地点で離岸した人工物が利用されていた。ウミウの巣はカワウと同様に多くが消波ブロック上にあり、堤防上は消波ブロックと隣接した部分以外はほとんど利用されていなかった。枝幸港、元稲府、紋別港、網走港でカワウとウミウの同所繁殖を確認した。村山 (2016) によると、ゴメ島のウミウは2007年50巣、2016年99巣確認されている。本調査の確認数はその1/5～1/10であり、遠方からの調査では有効な記録は得られない可能性があった。また、調査時には種不明ウ属として記録したが、村山 (2016) の報告ではゴメ島で繁殖するウ属はウミウであったことから、本報告ではゴメ島のウ属の記録をウミウの営巣数として取り扱った。元稲府の198巣は同時期の天売島219巣 (環境省自然環境局生物多様性センター, 2015) に匹敵する規模であり、ウミウにとって重要な営巣地のひとつであると考えられた。

ウミネコは目梨泊岬と隣接した漁港で多数が繁殖していたが、この場所は枝幸町教育委員会 (オホーツクミュージアムえさし) により継続して調査が実施されているため記録しなかった (村山, 2015)。この他にウミネコの営巣を確認したのは、元稲府の消波ブロック上の1巣のみであった。

オオセグロカモメは19地点で繁殖を確認し合計1,523巣を記録した。営巣数が多かったのは紋別港336巣と網走港493巣であった。この営巣数は同時期の天売島192巣・ユルリ島53-142巣 (環境省自然環境局生物多様性センター, 2015) よりも多く、オホーツク海沿岸はオオセグロカモメにとって重要な営巣地であると考えられた。自然物の利用は6地点で確認し、それらは宗谷岬西側の弁天島やゴメ島などの小さな島や沿岸にある岩礁であった。ゴメ島については遠方のため正確なカウントが

できなかったが、見える範囲に最低40巣を確認した。村山 (2016) によると、ゴメ島のオオセグロカモメは2007年288巣、2016年248巣確認されていることから、ウミウ同様に本調査の確認数は少なく、遠方からの調査では有効な記録は得られない可能性があった。人工物の利用は15地点で確認し、本研究で確認した総巣数の84.5%が離岸した堤防や消波ブロック上にあった。陸から接した堤防の利用は東浦、頓別、山白の3地点であり、陸から最も沖側の消波ブロック上にも各地点で1～2巣を確認した。本研究ではオオセグロカモメの建物の利用は調査しなかったが、移動中に見えた屋根上にオオセグロカモメの巣は見当たらなかった。長谷部 (2015) は、オオセグロカモメの営巣環境は屋根よりも離岸堤を好むことを示唆しており、オホーツク沿岸の各港には離岸堤が多いことから、屋根の利用がみられなかったのかもしれない。

近年、オオセグロカモメの営巣数の減少が確認されている (環境省自然環境局生物多様性センター, 2015)。しかしながら、2014～2019年に継続調査を行った4地点全てで営巣数の増加が確認された (表2)。このため、オホーツク海沿岸においてはオオセグロカモメの営巣数が増加傾向にある可能性がある。また、本研究で得られた2013年のオオセグロカモメの営巣数は、同時期の知床半島1,283巣 (環境省自然環境局生物多様性センター, 2015) と同程度の規模である。したがって、これまで注目されていなかった繁殖地の重要性が確認され、北海道全域におけるオオセグロカモメの個体群動態を把握するためには、主要な繁殖地以外のモニタリング調査も継続して行う必要がある。また、オオセグロカモメの増加要因についても、今後明らかにしていくことが求められる。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、風間健太郎氏には原稿に目を通していただき、貴重な助言をいただいた。山本友紀氏には紋別港のカワウの繁殖について情報をいただいた。渡辺恵氏には現地調査でご協力いただいた。これらの方々に深く感謝申し上げる。

引用文献

- エトピリカ基金, 2017. 平成 29 年度浜中町海鳥繁殖調査. NPO 法人エトピリカ基金.
- 福田佳弘, 2005. 知床半島における海鳥類の繁殖分布モニタリング調査 1997-2004 年. 知床博物館研究報告, (26): 21-24.
- 長谷部真, 2015. 北海道北西部の港におけるオオセグロカモメの人工物上の巣数. 利尻研究, (34): 33-35.
- 長谷部真・先崎理之, 2016. 礼文島における海鳥の繁殖記録. 利尻研究, (35): 25-29.
- 北海道海鳥保全研究会. オンライン. <https://hseabirdconservati.wixsite.com/hseabirdconservg/seabirds>. 参照日 2019-10-1.
- 環境省自然環境局生物多様性センター, 2015. 重要生態系監視地域モニタリング推進事業 (モニタリングサイト 1000) 海鳥調査第 2 期とりまとめ報告書: 5-24.
- 風間健太郎・小杉和樹・佐藤雅彦, 2014. 利尻島におけるウミネコの集団繁殖地の動態 -2005 ~ 2013 年の推定総個体数の推移と 2010 年以降の営巣地移動について-. 利尻研究, (33): 87-93.
- 今野怜・千嶋淳, 2019. 1996 年と 2000 年の海驢島で観察した鳥類と海鳥の生息状況. 利尻研究, (38): 01-06.
- 村山良子, 2015. 枝幸町目梨泊ウミネコ繁殖地. 北の海鳥, (1): 9-12.
- 村山良子, 2016. 枝幸町音標ゴメ島海鳥繁殖調査報告. 北の海鳥, (3): 18-24.
- Senzaki, M., M. Terui, N. Tomita, F. Sato, Y. Fukuda, Y. Kataoka & Y. Watanuki, 2019. Long-term declines in common breeding seabirds in Japan. *Bird Conservation International*: 1-13. DOI: 10.1017/S0959270919000352
- 渡辺義昭, 2016. 網走港で繁殖している海鳥 2015. 北の海鳥, (2): 8-16.